ぼちぼち草子

TANABE SEIKO

田辺聖子

ぽちぽち草子
田辺聖子（たなべせいこ）
© Seiko Tanabe 1992

1992年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。
（庫）

ISBN4-06-185213-2

講談社文庫

ぼちぼち草子

田辺聖子

講談社

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

女の定説 9
いま女は何を考えているか 21
理想の夫 35
アッと驚くショッピング 47
男親の教えた歌 61
子連れ男と継母の関係 83
子供の遍歴修行 99
「とんだりはねたり」と老いの花 111
子供地獄 123
何するのよ 135
老いのトバ口（くち） 147

男と女の違い　159
からむ　171
この頃世間のいやらしいもの　183
タマゴと私　195
社墓について　207
ホッとする……　219
別荘の持ちかたは　231
女にしてほしくない仕事　243
あとがき　254

ぼちぼち草子

女の定説

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

時々、私も色紙を頼まれることがあるのだが、これがいやで、苦しまぎれに

「気ばらんと
　まあ　ぼちぼちに
　　いきまひょか」

と書いたりする。大阪弁ででき上がった川柳まがいのものであるが、（「気ばらんと」というのは、〈気ばらないで〉というような意味の大阪弁である）この、「ぼちぼち」にいく、というのが大阪人は好きで、「どうぞこうぞ」とか「そこそこ」とか、このたぐいの言葉はいっぱいある。道ばたで旧知に会い、

「オイ、どないや、元気でやっとるか」

と聞かれて、

「ま、どうぞこうぞ、やってま」

などという。どうなりこうなり、という意味。儲かってるか、といわれた時は、

「そこそこ、でンなあ」

とか、

「ぼちぼち、ですワ」

というのである。（尤もこの場合の「ぼちぼち」はかなり、儲かっているという感触。「そこそこ」だと、いい線いってるニュアンスがある。ボーダーラインすれすれは、「あきまへんなあ……」と長い嘆息となり、全然赤字、というときは口調も切迫し、短く、断固として「あきまへん！」というのであるが、これが決然として発音するから、「アキマエ！」と聞こえる）

私のぼちぼちは、儲けに関係なく、「バランス良う世渡りしよか」とか、「自分の甲羅に似せた穴、掘ろか」とか、「そう言いつつも、まあ何とかアタックしてみよか」という意味もあるし、「いやいや、手ェ拡げんでもエエ……」とビビる気分も含まれ、そういうあたりの気分を包含して「ぼちぼち」というている。つまり一種の処世方針のようなものであるが、勿論、本気にこんなことを私が考えているわけではないのであって、色紙を出された苦しまぎれに書いたら、巧く、五七五になったというだけの話。私自身はその時任せで生きている。

しかし、自分の書いた言葉に、いつか自分で暗示を受けてしまうということは、あるものである。

何となく、私も「ぼちぼち派」であろうとし、あるような気にもなり、それで、「ぼちぼち草子」というタイトルを思いついたわけである。

ところで、こと女性に関する一般問題でいうと、「ぼちぼち」でやっていたら遅れをとってしまう。女性をめぐる現象の変化流動のはげしさは物凄い。私は昭和三年の生れなので、半世紀こ

わたる「女」のありかたの転変をつぶさに見ることができて、これは何という面白い時代に生れ合せたのであろうか、と悦に入っている次第であるが。

まず目ざましいのは世のかなりの名論卓説、女性に関する部分から古くなっていく、という発見である。皮肉警句諷刺も女性に関しては、ピント外れが多くなってきた。女性の貌が捉えにくくなってきたからであろう。

三島由紀夫は、あらゆる文章は形容詞から古くなってゆく、といったが、しかしまだ、三島サンの形容詞は斬新で、腐臭をたてていない。川柳の川上三太郎は「ような川柳」の大家であった。三太郎の形容詞は今なお古びぬ才気が潑剌としている。

〈女の子タオルを絞るやうに拗ね〉

〈基督のやうな顔して鰻ゐる〉

〈アイロンのやうに鴛鴦向きを変へ〉

などは五十年後の今でも笑わされる。感性的な形容詞というのは意外に生命力のあるものである。それに、たとえば「お盆のような月が出た」という形容も、使い方によってはそれなりに活かせるような時代になっていて、筆者の包丁さばき一つにかかっているという、文章に関しては寛容で可能性の多い時代になった。

しかし「女性の周辺」というのは、これはもう何としようか、ごまかしようがない。過去何世紀もの、女性に関する認識や考察、通説定説が引ッくり返ってしまった。片端から定説が古びてゆくのだから、定説に倚りかかって女を論じられない世の中になってしまった。女の部分から、

文章や思考が古びてゆくというのは、ここをいうのである。

その定説、というのは、まあさまざまあるが、たとえば、「女に友情はない」ということに、今まではなっていた。女の足を引っぱるのは女だ、といわれつづけ、女もそうかなあ、と思ってしまう。

しかし現代ではもはや、そう思っている若い女は少ない。

人気歌手でもあり作曲家でもあるユーミンこと、松任谷由実サン、この人は雰囲気のある美人で、しかも才女でユーミン語録が面白いところから、女性雑誌の花形のような人であるが、『MORE』'85・10月号で、こんなことをいっている。このユーミン、時に生意気に聞こえる不逞な言辞を弄することもあるが、それも含め、現代女性の代弁をしている部分もあって、そこがまことにキビキビと小気味よい、といったひと。

「女同士の結びつきのほうが強いの。フェミニストなのね。男はね、あっいいなと思ってもすぐ飽きるの。飽きさせないパワーで、この私に匹敵する人はいないんです。

イヤー、女子高生活が深いカゲを落としていますね。なんかこう女同士でいる楽しさを知っちゃってて。で、男がひとりでもそこに入ると役がついちゃう。女性のほうに。たとえば女友達で自然とワーッと集ってるときに、私のダンナが現れると、ま、私は妻になってほかの女性は妻の友人A・Bになっちゃう。そうすると面白くないのよね」

ユーミンには仲のいい旦那様がいて、「今でもダンナに3日くらい恋愛するときってありますよ」というひとである。それでいて、

「女同士の結びつきのほうが強いの」

と覚めた発言をする。これは女と女で協同して一つのことをなしとげるという機会が、多くなったことによって、女の友情が育ちつつあることを思わせる。

女たちは仕事の面白さを知り、それによって「女の友情」の面白さを知ったのである。そうなると、別に仕事を共にしないでも、女と女の間に友情が成り立つときもある。「おぬし、やるな」と女が女を評価し、みとめて友情は生れる。ユーミンの発言は、彼女だけがトビ上がって先端を切っているのではなくて、たぶん老若数多い現代女性の考え方を、広い裾野にしていると思われる。

宝塚歌劇というのを男性が取材すると、女の園の隠微な争いとか、男役にまつわる倒錯趣味とか、そちらの「定説」に落ちこみやすいが、女たちばかりで一つの舞台を創造するとき、「おぬし、やるな」という評価と信頼が互いになければ、とても三千人の観衆を満足させる舞台は創れない。トップスターは八十人の共演者を首肯させられるだけの実力を持たないと、一ときでもその地位にとどまれない。あの宝塚の舞台は華麗なだけではなく「女の仕事の面白さ」に首までどっぷり漬かった「女同士の結びつき」の楽しさを知った成果なんである。

彼女らがオフのとき、絶えず舞台について侃侃諤諤の議論をたたかわせていることなど、男性取材者は伝えもしない。演出者をまじえない場合でも、彼女らはおのおのそのキャリアによって、語るべきものをいっぱい持っているから、あの場面はこうすべき、この歌はこうあるべきと、議論しつくして倦まない。夜を徹して議論を闘わせる。私はそれを瞥見して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com